

## 聴解教育における教師の支援のあり方について —スキャフォールディングの観点から—

森沢小百合

【キーワード】 聞く力・教師の支援・スキャフォールディング・最近接発達領域・スパイラルアプローチ

### 1. はじめに

日本語の聴解教育において、学習者の「聞く力」を向上させるために、さまざまな方策がとられている。文脈理解、文法についての知識（統語論的知識、意味論的知識）、話の前提となる常識・知識、暗記すべきもの（あいさつ・慣用句・連語など）、文型、図式（スキーマ）などについてあらかじめ知識を与え、学習者に「聞く」手がかりを与える方法や、聴解を「自分でコントロールできない音の流れについて頭の中で雑多な処理を行わなければならない複雑な認知過程」と捉え、処理時間が多くかかると思われる初級の学習者には、意味の塊と塊の間のポーズを長めにおいたものを使用する場合もある（河野 1990）。また学習方法としては、言語要素の細かな部分から出発して次第に文や発話、文章・談話全体へ発展させていく従来型のボトムアップ方式と、ある言語表現を理解させるために、社会的・文化的な背景や言語的・非言語的な文脈から出発して、個々の情報を理解したり、特定の課題を達成したりするトップダウン方式が考え出されている。そして、このトップダウン方式を取り入れることで、聴解行動のさまざまなスキルを発動させることができるとし、本当の意味での聴解能力を養う教育というものが模索されている（加藤 1999）。そして、その他にも音声面や人間の記憶システムなど、様々な方面からの研究がおこなわれている。

このように、学習者の「聞く力」を向上させるために数多くの方策が考えられているのだが、本当にこれらの方法を実践すれば、学習者の聴解力が向上するといえるのだろうか。実際の授業の中で学習者と対峙しているのは教師である。教室が、教師と学習の対話で成り立っているとするならば、方法論だけではなく、教師の有効な支援が学習者の「聞く力」の伸長を左右するのではないだろうか。

そこで本論では、方法論からだけでは見えてこない「聴解教育における教師の支援のあり方」について、考察を試みたいと考える。そして、その一つの方法として、学習者への足場づくり＝スキャフォールディングの理論を援用した聴解教育を挙げる。論文の流れとして以下でまず、スキャフォールディングとは何かについて述べ、次にその理論を聴解教

育で考えた場合、どのようなスキファオールディングが有効といえるのか、実際の聴解授業を振り返りながら検討し考察していく。

## 2. スキファオールディングとはなにか

スキファオールディングとは、学習者が新しい理解・概念・能力を発達させようとするとき、教師がおこなう一時的で体系的な支援＝足場づくりのことを指す。つまり、学習者が自分ではうまく扱うことのできないタスクを達成できるようにしたり、理解を発展させたりするのに必要な援助をするための教師の支援のことである。しかしその支援は、単に学習者がそのタスクを成し遂げるのを助けるものではなく、いずれは学習者自身が自らの力で同様のタスクを成し遂げられるような知識・スキルを手に入れられることを意図した支援を意味している。そのために、学習者が徐々に力をつけていくなかで、教師も支援の量を徐々に減らしていく。つまり、単なる「助け」とは違うということである。

では、どのような時に、スキファオールディングの有効性が発揮されるのだろうか。学習場面の構造を考えたとき、低度な挑戦で低い支援では、学習者のやる気はおきないし、ほとんど学習はおこらない。低度な挑戦で多くの支援を行った場合には、教室活動を楽しむかもしれないが多くを学ぶことはない。つまり多くの学習がおこるのは、高度な挑戦で多くの支援を受けたときであり、そのような時に学習者は自分の現在の能力を超えて、さらに上へと持ち上げられるという。これは、ヴィゴツキーの「最近接発達領域」の概念と深い関係がある。「最近接発達領域」についてヴィゴツキーは以下のように定義している。

「最近接発達領域とは、独力による問題解決によって判定される（学習者の）実際の発達水準と、教師の指導下、あるいは自分より能力の高い仲間と協働することを通じて判定される潜在的な発達水準の間の範囲のことである」

つまり「最近接発達領域」とは、新たな学習が起こりうる範囲の上の境界と下の境界＝領域を示したものであり、学習者が「最近接発達領域」の範囲内で学習するなかで、教師が媒介的な支援をする役割を果たすことにより、学習者の理解や知識を拡大することができたときに「学習」が起こると考えられるのである。

また「最近接発達領域」は、教師と学習者がある特定のタスクと一緒に取り組む際に、両者の対話を通して協働で形成されるものであり、効果的なスキファオールディングによって、「最近接発達領域」の境界が広がり、学習者の現在の能力よりも高いレベルへと引き上げることが可能になると考えられる。

## 3. 聴解教育とスキファオールディング

それでは、このスキファオールディングの理論にもとづいた聴解教育を考えた場合、ど

のような形が想定されうるのであろうか。

まず1つめに、教材の問題がある。前章で述べたとおり、高度の挑戦で多くの支援を受けたときに学習が進むのであるとするならば、使用する教材は学習者にとってレベル的に多少高めのものを選定したほうがよいということになる。そのためにも、教師は、学習者の「聞く力」のレベルがどこにあるのかを熟知していなければならない。

つぎに、高度な挑戦をいかにスキヤフオールディングするかであるが、この場合有効と考えられる学習方法に「スパイラルアプローチ」がある。「スパイラルアプローチ」とは、ある項目を学習したあと、次にその学習した内容に新しい情報を少しずつ付け加えながら、螺旋階段を上がるように徐々に学習を高い段階に高めていく学習方法のことである。つまり、学習者にとって高度と思われる教材も、学習者の発達段階にあった方法で指導することで理解させることが可能であり、学習者の「学び」の段階が上がるにつれ、同じ教材を前回よりも高度な形で再学習させ、最終的にはその教材を理解させることができると考える。

そして、最も重要なのが、教師と学習者の対話によるスキヤフオールディングである。学習を、他者との関わりの中で生まれるものであると考えるならば、教室内で教師の働きかけがもたらす効果は、かなり大きいと思われる。たとえば語彙の説明の時、教師が一方的に意味を説明するのではなく、「これと同じ意味の言葉はなにか」というように、学習者に質問しながら答えを導き出すことで、教師と学習者、または学習者同士の双方向の教室活動を展開することが可能になる。また、対話を通じて、情報と知識が共有され、新しい視点が見えてくる。教師が学習者の「学び」に影響を与えると同時に、学習者もまた教師に影響を与えていると考えられるのである。

#### 4. 聴解教育の実践例からの検証

この章では、実際の授業でどのような教材が使われ、どのような授業の流れがあり、どのようなスキヤフオールディングがおこなわれ、それがどのように学習者の「聞く力」に結びついていくのかを検証したいと考える。例としてあげるのは、別科聴解6レベルのクラスを対象におこなわれた聴解の授業である。

授業日時：2004年6月14日 3時限

対象クラス：聴解6レベル

教材：NHK首都圏ニュース「見通し良好 死角あり」

この授業をとりあげた理由は、「使用教材が学習者のレベルよりも高かったはずなのに、学習者はニュースの内容を正確に把握することができた」ことから、学習者の「聞く力」を向上させる要因とは何かをみる上で、適当と考えたからである。以下、教材、授業の流

れ、教師のスキファオールディングの順で考えていく。

### ●教材について

別科聴解のクラスは、主にNHKで実際に流されたニュースを使い、学習者に生のものを聞かせることで、聴解力をつけさせることを目的としている。今回の授業で取り上げられた「見通し良好 死角あり」のニュースも、NHK首都圏ニュースのなかで、特集として9分程度にまとめられたものである。

ニュースの内容は、「見通しのよい交差点で、なぜ車の衝突事故が多発するのか。その原因は人間の目の特性にあり、ものがはっきり認識できるのは全体の視野（180度）のなかのわずか5度であり（中心視野）、残りの周辺視野では動かないものには反応が鈍い。つまり、同じスピードで左右から近づいてきた車は、周辺視野の中でずっと同じ位置に止まっているようにみえるため、気づかれにくく、このような衝突事故が発生してしまったと考えられる。こうした目の特性をふまえ、事故が多発している交差点に、白と赤で色分けされたポールを設置することで事故を未然に防ごうとする取り組みがはじまっている」が概略となる。一見すると難易度の高い教材であり、新出語彙も「死角、出会い頭、中心視野、周辺視野、特性」などの専門用語も多く使われていることから、キーワードが聞き取れなければ内容把握も困難と思われるようなニュース教材である。しかし実際の授業では、多くの学習者がキーワードを類推しながらも聞き取り、内容把握においてもほとんどの学習者がかなりの量をまとめあげた。これらは、使用教材が学習者のもつ聴解レベルよりも高度なものであったにもかかわらず、あとで述べるような教師のスキファオールディングにより、「聞く力」のレベルが引き上げられものと思われる。つまり、スキファオールディングの観点からいくと、学習者の「聞く力」を向上させるのに適した教材であったといえるであろう。

さらにこの教材が、学習者の興味を誘うような内容であったことも、「聞く力」（「聞く」とする力）の向上に結びついていったものと考えられる。

### ●授業の流れについて

授業の主な流れは以下の通りである。

- 1) 導入は特になし（これから見るニュースの内容に関して、何のインフォメーションも与えない）
- 2) 全体視聴（概要理解）
  - ・ニュースを1回通して視聴させ、簡単なメモをとらせる
  - ・メモをもとに、要旨をまとめる
  - ・何人かの学習者に、自分のまとめた要旨を発表させる
  - ・ニュースの中のキーワードを、一人ひとつずつ発表させる

### 3) 段落視聴

- ・段落ごとにビデオを止め、その部分の内容を言わせる
- ・聞き取れていなかった部分は、もう少し短く切って（1，2文）内容確認をする
- ・新出語彙や文型の確認をおこなう

### 4) 練習

- ・内容を理解しているかどうかを確認するためのワークシート（段落ごとの内容について、正確に聞き取れているかがわかるような問題を4題含んだもの—例：「3. 警察は、どんな対策をとりましたか」）を配布し、ニュースをもう1度全体視聴させ、ワークシートに記入させ、回収

### 5) 発展練習

この「発展練習」については、院生担当のディベートだったため、本論文では特に触れないこととする

以上、この授業のながれを、前章の「スパイラルアプローチ」の考え方から検証してみたい。「スパイラルアプローチ」は、1つの教材を使って学習のレベルを低次から高次へと発展させることで、学習者の「学び」の段階をあげていこうとするものであるが、この授業でも低次から高次へと学習レベルをあげていく方法がとられている。

まず導入であるが、ニュースの内容には一切ふれずにいきなりビデオを視聴させている。これは、ニュースのポイントが「人間の目の特性」という口頭で説明しても理解できるようなものではなかったために（情報を与えることで、かえって学習者を混乱させてしまう）、あえて何の情報も与えずに視聴させたものと思われる。また、学習者に先入観をもたせないことで、「どんな内容のニュースなのだろうか」という学習者の興味を喚起することにも役立っている。「ニュースを見る」ということに集中させた低次レベルの導入と考えられる。

次に、「全体視聴」で要旨を把握させる方法も、全体としてどんな内容のものであったかが分かればよい形になっており、細かな部分の聞き取りは問題にせず、聞き取れた部分からの類推で全体をまとめることもできる。その後、段落視聴、部分視聴をおこない、正確な聞き取りを要求していくことにより、高次レベルの学習へと発展させていく。内容理解確認のワークシートも、段落ごとの内容を自分のことばでまとめなければいけない形式になっており、これは教材理解の最終段階に位置していると考えられる。

以上の観点から、授業の流れ自体も、学習者の「学び」を向上させる流れになっていたといえるであろう。

さらに、聴解教育の性格上、同じビデオを何度も視聴することになるため、1回1回に聞く意味を持たせ、学習者に飽きさせない工夫が必要となる。その意味でもこの授業構成は、学習者に「聞く」必然性をあたえることにも成功していたと考えられる。

## ●教師によるスキヤフオールディング

以上、使用教材・授業の流れをふまえた上で、この授業でどのようなスキヤフオールディングがおこなわれ、どのように学習者の「聞く力」「学び」に結びついていったのかを検証する。

授業の中で、教師がおこなったスキヤフオールディングと思われる部分を抜き出してみたい。

- ・学習者が聞き取れたものを、キーワードとして1つ挙げさせる  
「一さん、どんなことが聞き取れた？」
- ・「どんな場所で事故が起きているのですか？どんな交差点？」
- ・「出合いがしら」ってどんな意味？漢字は？
- ・答えられない学習者の場合「一さんは、これ好きではないのですね。きらいでも、もう一度よく聞いてみてください」
- ・学習者の一人に「人の目の特性」について口頭で説明させようとする。学習者がうまくまとめられないとみるや、「じゃ、今の部分でどんな単語が聞き取れた？キーワードをあげてみてください」と学習者からキーワードを引き出させ、それをもとに再度説明させる。
- ・「一に限って」は、どんな意味？例をあげてみて
- ・「ちらちらしている」は、ほかにどんなときに使う？

以上挙げたほかにも、教師によるたくさんのスキヤフオールディングがおこなわれていた。上記に挙げられたスキヤフオールディングからも分かるように、教師は答えを教えることはしていない。分からない場合には、別の言い方を考えさせたり、類推させたりしている。また、他の学習者の挙げた答えを聞いて（挙げられたキーワードなど）、自身では聞き取れなかった部分が補足され、次の聞き取りにつながっている。さらにここで注目したいのは、教師と学習者の対話である。ここには学習者の発話は乗せなかったが、上で挙げたような教師からの働きかけに、学習者は分からないながらも何らかの答えを導き出そうと努力していた。そしてそれが完全ではない場合には、教師がさらに働きかけをし（スキヤフオールディングをし）、さらに上の段階の「学び」へと学習者を引き上げていくようすが見て取れた。そして最終的には、ほとんどの学習者が内容理解のワークシートにおいて、かなりレベルの高い要旨把握をまとめあげたのである。また、学習者のようすに合わせ、教師のスキヤフオールディングの形も変化していったことから、学習者もまた教師への働きかけをし、それが教師に影響を及ぼしていたともいえる。

さらに教室活動を左右するものとして挙げられるのは、教師と学習者、学習者同士の人間関係である。教師は、学習者との人間関係を円滑にするため、授業外でも学習者に気軽

に声を掛けたり、授業中も学習者が緊張して答えられないようなことがないような配慮をおこなっていた。このような人間関係があつてこそ、スキヤフオールディングも有効性を発揮できるのではないかと考えられる。

スキヤフオールディングの目的は、教師と学習者の対話におけるスキヤフオールディングの中で学習者の「学び」が引き上げられることで、学習者が決して一人では達成できなかったものが、成し遂げられることにある。この授業で、学習者は一人ではたぶん聞き取ることのできなかったニュースを、教師、学習者同士の対話を通し、自分のものとしていったといえるのではないだろうか。

## 5. まとめ

以上、実際の聴解の授業を取り上げ、教師のスキヤフオールディングが学習者の「聞く力」「学び」にどう作用していったのかを検証した。この授業から見えてきたのは、教師と学習者の互いの相互作用の中から「学び」が生まれていくということである。つまりそれは、聴解の方法論だけでは決して達成させることのできなかったものだといえるのではないだろうか。

教師は、学習者が今どの段階にあるかを的確に見極めた上で、学習者の現在のレベルよりも高めの教材選定をおこない、学習者の「学び」を段階的に引き上げていけるような授業の流れを組み立て、さらに学習者との対話のなかでスキヤフオールディングをおこなっていく。その中に、学習者の聴解力向上のための研究成果を組み込んでいくことが、本来の聴解教育のあるべき姿なのではないだろうか。つまり、まずは方法論ありきではないということである。

そしてこれは、聴解教育に限ったことではなく、日本語教育をはじめとする教育の全ての分野で考えていくべきものである。学習者の「学び」は、教師の支援によって大きく左右される。そのことを教師は常に念頭において学習者と向き合っていくべきであると私は考える。

(モリサワサユリ・修士課程1年)

## 参考文献

- 岡崎敏雄・川口義一・才田いずみ・畠 弘巳編（1992）『ケーススタディ日本語教育』おうふう
- 海保博之・柏崎秀子編（2002）『日本語教育のための心理学』新曜社
- 加藤清方（1999）『日本語教師養成通信講座14 視聴覚メディアと日本語教育』アルク
- 河野守男（1990）「Perceptual sense unit と echoic memory —言語の timing control に関する一試案—」『「日本語音声」研究報告3』文部省科学研究費補助金重点領域『日本語音声』総括班報告書

日本語教育学会（１９８８）「特集 聴解の指導」『日本語教育』６４号

Hammond, J. (2001) Scaffolding:teaching and leaning in language and literacy education, Sydney:Primary English Teaching Association